

5 羅城門

らしょうもん

知る

■羅城門とは？

羅城らしょうとは、古代都市を取り囲む城壁のことで、羅城門は羅城に開かれた門です。中国では外敵防禦のため堅固な羅城が築されましたが、日本では藤原京以来、京城の南面の羅城門の両翼のみに造られただけで、周囲には簡単な垣（土塁）と溝が設けられていたようです。

平安京の羅城門は、朱雀大路すざくおおぢの南端に建てられた都の正門です。読み方は、呉音で「らしょうもん」、漢音では「らせいもん」となります。「らしいせい門」（『宇治大納言物語』）『世継物語』 や「らせい門」（『拾芥抄』）とも呼ばれ、「らしいしやう（頼庄）」（『延喜式』）や「らしやう」（『拾芥抄』）は俗称とされていますが、中世には観世信光かんぜのぶみつ作の謡曲「羅生門」の影響からか「らしやうもん」が一般化したようです。

なお羅城門跡は江戸時代には、唐橋村字来生からはしむらあざらいせい（現南区唐橋羅城門町）といました。来生は「らしいせい」のあて字です。

■羅城門の形状と規模

門は重層で入母屋造いりもやづくり、瓦屋根に鴟尾しびがのつていました。規模は、幅十丈六尺（約三十五メートル）、奥行二丈六尺（約九メートル）、高さ約七十尺（約二十一メートル）。正面柱間

が七間で、そのうち中央五間に扉が入り（七間五戸）、左右



ぱるるプラザに展示された十分の一模型（現在非公開）

の一間は壁であつたと考えられています。木部は朱塗り、壁は白土塗り。内と外は、幅が七丈（約二十四メートル）五段の石段で通じていました。

朱雀大路の南端に建つ羅城門と、約四キロメートル北に建つ朱雀門は同じ形と大きさであつたとみられています。他の門が、五間三戸だったことを考えるとその大きさがわかります。

■羅城門の変遷

羅城門は高さ幅に対して奥行が短いことから風に弱かつたらしく、弘仁七（八一六）年八月十六日、大風により倒壊しました。その後再建されましたが、天元三（九八〇）年七月九日の暴風雨でふたたび倒壊しました。

寛弘元（一〇〇四）年、丹波守高階業遠たかしなのなりよおが羅城門を造る

ことを条件に任期の延長を申し出て認められましたが、翌年に、はばかるところがあるとの理由で辞退しています。従って、天元三（九八〇）年以降再建されることはありませんでした。

治安三（一〇二三）年には、藤原道長が法成寺造営に際して、羅城門などの石を運ばせました。その頃の羅城門は、礎石がかろうじて残っている程度に荒廃していたと考えられます。

羅城門は外国からの使節を迎え入れる時、平安京の威容を見せるために造られた、みやこの表玄関でした。渤海や新羅からの使節がとだえるにともない羅城門の役割がなくなり、再建される必要がなかったのでしょうか。

■羅城門に関する逸話

宇多天皇の『寛平御遺誠』や『宇治大納言物語』『世継物語』には、羅城門創建時の話が伝えられています。

巡行中の桓武天皇が、工匠に羅城門の高さを五寸減すべきことを命じ、再度の巡行で工匠に聞いたところ、すでに減じたと答えました。それを聞いた天皇が後悔しているのを見た工匠は失神しました。そこで理由を聞いたすと、実は天皇の命に従っていなかったと告白したため、天皇はその罪を許したというものです。

工匠の腕と天皇の目の確かさを示す逸話として伝えられたものですが、危惧するほどに羅城門が高かったことから生まれた話と考えられます。

また、羅城門には鬼が住むといわれ、大江山の酒顛童子を

退治したことで知られる源頼光の四天王のひとり渡辺綱が羅城門の下を通ったとき、楼門の上から大きな鬼の手がのびてきたので、綱はその手をつかんで切り落としたといいます。

歩く／見る

■羅城門遺址 南区唐橋羅城門町（花園児童公園内）

明治二十八（一八九五）年、平安遷都千百年記念祭の事業の一つとして、湯本文彦の提案による平安京実測事業がなされ、羅城門の位置を決め、京都市参事会によって「羅城門遺址」の石碑がその地に建てられました。

決定の方法は、延暦十五（七九六）年の創建以来、位置が



不動とされた東寺の南門を基準点として、そこから曲尺で計測して、九条通の南端の位置を決定し、さらに計測して朱雀大路の中心、すなわち羅城門の中心を決めました。

た。

なお考古学的には羅城門の遺構はまだ発見されていません。

■羅城門復元模型

平安建都千二百年を記念して、附属施設も入れて全体の大さが幅八メートル、奥行三・六メートル、高さ二・四メートルの十分一大型模型が、平成六（一九九四）年に京都府建築工業協同組合の手で製作されました。当初は京都駅前のおぼろのプラザ（現メルパルク）地階に展示されましたが、現在は公開されていません。

また三十分の一模型が、京都府京都文化博物館（中京区三条通高倉）に展示されています。

■兜跋毘沙門天立像

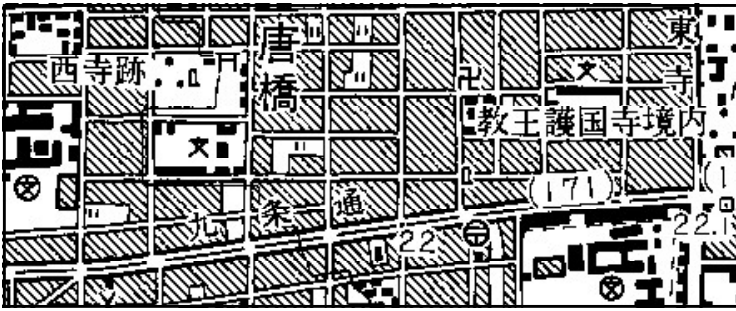
現在は東寺（南区九条町）の所蔵ですが、もとは羅城門の楼上に安置されていたものといわれます。唐の時代に作られた名作で、高さ六尺四寸（約百九十センチメートル）の威風堂々たる体躯、頭上には宝冠と輪宝をいただき、足下には小鬼を踏みつけ、いかにも異国的（兜跋は吐蕃・チベット）な風貌を漂わせています。国宝。

■小説と映画の「羅生門」

芥川龍之介の小説「羅生門」は、『今昔物語集』卷二十九の「羅城門上層ニ登リテ死人ヲ見シ盗人ノ語」を素材にして、羅城門の楼閣上に盗賊が住んでいたさまを描いています。芥川龍之介の小説『藪の中』を素材として黒澤明は映画「羅

生門」（一九五〇）を製作し、一九五一年度のイタリヤ、ベニス国際映画祭で最高の栄誉であるグランプリとアメリカのアカデミー外国映画賞を獲得しました。

映画「羅生門」のオープンセットは、大映京都撮影所の広場に建設され、間口十八間（約三十三メートル）、奥行十二間（約二十二メートル）、高さ十一間（約二十メートル）、柱には周囲四尺（約一・二メートル）の巨材十八本を使用して造られました。正面に掲げられた扁額は、縦五尺（約一・五メートル）横九尺（約二・七メートル）あり、崩れかけた屋根の瓦は、四千枚を焼いて、延暦十七年（七九八）という年号を彫り付けました。



羅城門遺址附近図。画面中央よりやや右寄りに郵便局のマークが見える。国道171号をはさんですぐ北が遺址。右端に東寺の境内、左に西寺跡が見え、羅城門はふたつの大寺院の中間にあった。

* 国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000（地図画像）を複製。承認番号平14総複第494号